

ふれあい新聞発行に携わって



和氣 満寿一

平成4、5年度と2年間にわたって、本紙の発行のお手伝いをさせて頂きました。記事を寄せて下さった方々にまずお礼申し上げます。

今、振り返ってみると長いようで短い2年間でしたが、何とか続けて発行することが出来ました。記事をお願いするにあたっては、大体において締め切りまでに余裕のないことが多く、ご迷惑をおかけしました。この文を書いてみて、初めてその気持ちがよくわかりました。

さて、2年前に町内会の広報担当を引き受けた当初は、今までとはちょっと違った企画をと、色々なコーナーを始めたのですが長続きせず、ほとんどが企画倒れに終わってしまいました。やはり反省点として、自分で一生懸命取材活動をするのが足りなかったせいだと思っております。結果的に町内会長、各種団体の長の方に無理なお願いをする結果になってしまいました。

自分がしないでこういう提案をするのもどうかと思いますが、次のような記事があったらなと今でも思っております。

1. 町内の慶弔のお知らせ
2. 各家庭の自己紹介
3. 不要品の物々交換
4. イベント(例、各団体のスポーツ大会等)の予定と結果



以上のような記事を書くには、日頃の情報収集が必要で担当者は大変だろと思いますが、一考の程よろしくお願致します。

最後に、中尾前町内会長の連載記事は田中野田の歴史を知るに当たって貴重な資料となっており、是非とも永続していただきたいと思します。

愛育委員をよろしく

昨年度をもって田中野田の婦人会は、その長い歴史を閉じることとなりました。しかし従来の愛育委員の仕事の中には、町内の方々の健康診断の世話など重要と思われるものも幾らかありますので必要最小限の仕事は、引き続いて行うこととなりました。皆様にはその趣旨をよくご理解頂きまして、ご協力下さいますようお願い致します。

平成6年度愛育委員

和氣 良江・久山桜沙米・原 道子

わが郷土を語る(その20) 中尾 佐之吉

“御野君(みのごり)へ嫁にやるな”

昔こんなことが囁かれていても嫁のきてがなかったわけではないが「みのごり」とは、この地方のことである。私たちにっては、恵まれた土地と思っているのに、「嫁にやるな」と云われていたと云々という問題である。しかし、単純に題をたてる前に、何故そのようなことが云われたのか考えてみることにしよう。その前に、まずは「御野郡」とはどのあたりをさすのか、と云うことから話を始めることにする。

1、御野郡とは

この地方を含め概ね旭川右岸、笹が瀬川左岸のうち玉柏以南で岡山下町を除いた地域である。明治の初めは51村もあったが、明治22年町村制がしかれて、当時はつぎの10か村となっていた。

牧石村・御野村・伊島村・石井村・鹿田村・古鹿田村・大野村
今 村・芳田村・福浜村

このうち、御野・伊島・石井・鹿田・古鹿田の各村は明治・大正期に、福浜村は昭和6年岡山市へ合併し、残りの村も現在すべて岡山市へ編入されている。

2、夏暑く冬寒いこと(当たり前のことであるが、それでも――)

御野郡は、旭川・笹が瀬川のデルタ地帯の新開地で岡山平野の一部をなしている。全国的にみれば、岡山は気候温暖で恵まれた地域である。ただ、冬は「備前のからっ風」と言われるように、岡山平野を冷たい風が吹き荒れる。また、夏は「備前の夕風」と言われて、その時間帯には風がぱたり止んで耐えがたい蒸し暑さを感じる。

北隣の津高郡(注1)などで見られるように、山を背にして南面に集落をつくっているようなところは、比較的ではあるが冬暖かく夏涼しいわけで、これらの地区の方たちが、沖の広い田園地帯に点々と建つ家が寒風に吹きさらされているのを見ると、痛々しく思えたりする。このことも理由になったかもしれないが――。

3、労働がきびしい

「嫁にやるな」の根拠の第一は労働がきびしいと言うことであらう。昔、農作業はすべて肉体労働であったと言う点では、何処も同じであったと云える。しかし御野郡は、昔から草の栽培の盛んなところであった。(とくに作付反別が増えたのは、明治の半ば以降とおもわれる)い草は、寒い冬に水を張った田圃へ植える。また、刈り取りは真夏の土用の炎天下である。そして農家の主婦は、農閑期を利用して畳表を織るのである。しかも、夜業までしてのことであるから休む間もないくらいであった。とくに、若い嫁さんがこき使われるとなれば、可愛い娘に苦勞させたくない親心が、このような「嫁にやりたくない」の言葉となったのであろう。ただし、悪いことばかりではないのであって、当時草の栽培は、水田の裏作として大きな収益を得、また、副業としての畳表の製織も、農家に現金収入をもたらした(注2)経済的にゆとりある生活ができていたことも申し添えておかねばならない。(注3)

4、変わってしまったこの地区

今この地方は、区画整理による道路網の整備により、かつての田園地帯が急速に都市化していて、昔の面影は無くなってしまった。田んぼも少なくなつたし、栽培されたい草はも早みられない。冷暖房の完備した家屋、電化機械化が進み車社会といわれる現代生活の中では、「嫁にやるな」は死語でしかなく、この言葉がもたらすかつてのさまざまな思い出がなつかしくさえ思えてくる。

昨夏、市内のバス停で待ち合わせしているとき、主人の勤めの関係で北海道からきているという婦人が、「岡山の夏は暑い、それに魚がおいしくない、早く北海道へ帰りたい」と話してくれるのだ。気候、食べもの、その他なんでも良いところと思っていた私には、岡山がいやだときいてびっくりしたが、考えてみて、「住めば都」で、自分の生まれ育つたところが最高と思うのが、一番良いのだと改めておもう。

――ふるさとにはありがたかなだ、郷土を愛しよう――

注1 御野郡は明治33年の郡制施行により、津高郡と合併し御津郡となった。

注2 昭和10年頃、い草反当粗収入は、約200円(足籠 80尺x250匁)中畳畳表1束(10枚)は10円位だったとか(小野田 弘氏談)(当時、米は1俵10円程度として、米作の反当粗収入は自作地で70円―80円くらいと考えられる。――)

注3 昭和10年発行の「岡山県農業要覧」によると、つぎの記事が見られる。(1316ページ)

「(岡山県)南部地方山陽線沿線地帯は、東大阪府南部地方、愛知静岡の両県、広島県の備後地方、愛媛県の一部と共に全国有数の副業地帯を形成し、白亜門塙の農家相並んで豊裕なる農村の模範と称せらるるもの、副業に負う処誠に勤しめぬのである。」

◆ 秋山 要様より香典返しとして、町内会へ金一封を戴きました。

◆ 田中野田婦人会の解散に伴い、婦人会より公会堂建設資金として20万円戴きました。

◆ ミ ニ ミ ニ ニ ュ ー ス ◆

- 田中野田町内会は、環境整備の優良町内会として、本年3月1日市長より感謝状を頂きました。
- 懸案でありました公民館は、順調に行けば平成7年度に田中地区にできる予定です。
- 田中の体協は、御南学区誕生を機に田中と野田が分離することに、関係者の話がまとまりました。

―― あ と か き ――

ふれあい新聞も回を重ねて30号の発行となりました。今年も皆さん喜んで頂ける魅力ある新聞になりますよう頑張りたいと思いますので、ご協力の程よろしくお願致します。

田中野田の戸数は、平成4年ごろから1年に50戸の割りで増えており、現在は350戸を数えています。新しく来られた方々をはじめ皆さんが、田中野田に住んでほんとはよかったです喜んで頂けるような町内にして行きたいと思します。そのための一助としての役割を担っているふれあい新聞でありますので、趣旨をご理解くださいます。温かい目で育ててやって頂きたいと思します。

今年役員改選の年でしたので、発行が遅れましたことをお詫び致します。

編集部 和氣・原